
兄として……

佐原 優尉千

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄として……

【Nコード】

N8345P

【作者名】

佐原 優尉千

【あらすじ】

高校一年生、十六歳、四月。入学して二週間も経たない頃、主人公の上井 真護は両親を亡くした。そんな少年が残された弟と妹の三人で生活していこうとします。しかし、少年も高校生。恋だっぺします。さて、この少年は今後、どう生活していくのでしょうか。学校生活や私生活、また、少年の恋模様はどうなっていくのやら……

前書き、序章

そこにはたくさんの本棚があった。広さは少し小さめの図書館といった感じの部屋だ。その本棚すべてに隙間なく本が並べられていた。しかし、整頓された状態かどうかと聞かれると……微妙なところである。本棚の中の本は五十音順にも、作者ごとにも並べられていない。てんでバラバラである。

そんな部屋の中心部分の本棚に立て掛けられた梯子を、僕は上っていた。そして一冊の本を手に取り、この部屋に唯一ある一對の椅子と机に向かった。

「さて、と。初めまして。すみませんね、物語の前に。前書きとでも受け取ってください。ああ、自己紹介が遅れました。僕は栗田といます。皆さんにお聞きしておきたいことがあったので、このように物語の前にお邪魔させていただきました。さて、お聞きしたいことというのはですね……まあ、変な奴だ。とお思になるかもしれませんが、どうぞお付き合いください」

さて、あなたは今、生きている人生が物語だと思ったことはありませんか。私は何度となくあります。「ひょっとして、“僕”という存在はこの世界を作り出した誰かが書いた物語なのではないのか」と。「僕がこうしてテレビを見ながらこの本を書いているのも、僕の物語の作者が書いているのではないか」と。あなたはそう思ったことはありませんか。もし、「ない」というのなら、それでも構いません。でも、少しだけ考えてみてください。今の自分の人生が作られたものなのか、自分で作っているものなのか。

人に作られている。そんな風に考えるのは僕としてもあまり気持ちのいいものではないのですが……でも、どうしてもそう考えてしまうのです。時々でいいので、あなたも考えてはくれませんか。何気ない時で構わないので。

いやはや、二度も頼んでしまってすみませんね。それでは、そろそ

る物語を読み進めましょう。この話の主人公はある家族の長男です。その主人公の男の子は十六歳なのですが……いや、これ以上話すのは止めておきましょう。先に言ってしまうと、物語を純粹に楽しめなくなりますからね。では、楽しんでください。僕は、またあなたに会うことを楽しみにしています。それでは。

序章 さよなら、サヨナラ、サヨナラ……

どこまでも青く澄んでいた空が赤い夕焼けの空に変わっていく様子を俺は”上井真護”は、ただただ呆然と見ていた。

「……」

きつと、口を半開きにして見ていたに違いない。ただ、山の向こう側へと陽が沈むだけの風景なのに、いつだって見ているはずの風景なのに、俺は美しいとしか思えなかった。それだけの風景のほずなの……

スツと何かが頬を伝った。雨か。と、俺は思った。ここは雲を抜けるほど高くではないが、山頂だ。急な気象の変化があっても不思議ではない。しかし、空を見上げても雨雲など一欠片もない。

(……ああ、泣いてるのか)

答えに辿り着いた時、俺は自分の事のはずなのに、どうしてか客観的にしかその事を捉えられなかった。

不思議だった。俺がなぜこの景色を見て泣いているのか、どうして、どうして泣きたい時に泣けなかったのか……

そう思ったらまた一滴、頬を伝うものがあつた。それは、今まで溜まっていたいたものを吐き出すような勢いで溢れてきた。止めようがなかった。いや、止めようとも思わなかった。

気付けば俺は泣き叫んでいた。こんな姿を弟と妹には見せられないと思った。

(でも、でも……今だけは、今だけはせめて……)

そう思った。今、この場所には俺しかないのだから。

（今は、今だけはいいいんだ。）

そう自分に言い聞かせて俺は泣き続けた。この涙が、（この涙が止まったら、弟たちが慕っている、しっかり者の”お兄ちゃん”に戻ろう）

そう思っただ俺は泣き続けた。今流れてる涙が枯れるまで。泣けるだけ泣きたかった……

どれくらいの間そうしていたのだろう。まだ陽は沈んでいないから、そんなに長い間ではないだろう。涙は止まっていた。でも、俺は泣いていた。泣き続けていた。

不意に後ろから足音が聞こえてきた。瞬間、俺を不安感が取り巻いた。弟たちだろうか。俺たちは今、この山頂の近くにある祖父たちの家に来ている。さほど危険な山路ではない為、弟たちが来られないわけではない。弟たちにこんな姿を見せるわけにはいかない。しかし、俺の嗚咽は止まらなかった。いや、止められなかった。どうしよう。そう思っているうちに足音は近づいて来て、僕のすぐ隣で止まった。そして、その人物は僕の肩にそっと手を置いた。その手は弟たちのものではなかった。その手は長い間生きている者の手だった。皺が多く、爪が少し黒ずんでいて、俺よりも少しだけ大きな手……その手の持ち主を俺は見上げた。

「……お祖父ちゃん」

祖父だった。祖父は俺と目が合うと、フツと微笑んでくれた。顔は笑っていた。けれども、目には悲しみが浮かんでいた。その悲しみが祖父の目から消える事は今後一切ないだろう。

神様は俺の家族の自然の摂理を砕いた。俺や弟たちにとっては早過ぎた。祖父たちにとっては順番が逆だった。しかし、それだけの事なのだろう。

祖父は微笑んだまま僕に優しく囁いた。

「悠真くんにも真奈ちゃんにも、ここには来ないように言っている。だから、落ち着いたら戻っておいで」

俺は無言で頷いた。すると、祖父は家の方へと戻っていった。祖父

の気遣いと優しさが胸に染みだ。俺よりも苦しいはずなのに、辛いはずなのに……俺を慰めてくれた。その事に俺は感謝し、同時に申し訳ないと思った。

それから陽が沈みきるまでの間、俺は泣き続けていた……

前書き、序章（後書き）

初投稿で至らぬところもあるかもしれませんが、よろしく願います。

これから……**(前書き)**

学校生活が始まるまでです。

これから……

一週間が経った。学校の忌引き期間が終了し、登校しなければならなくなった。正直、俺の心境はまだ落ち着いていなかった。しかし、弟と妹は意外と鋭いので、少しでもそんな素振りをしてはいけない、と自分に言い聞かせて、落ち着かない心を無理やりに抑えつけ、落ち着いているという鍍金^{メッキ}を心にかぶせた。そして、

「悠真。真奈。あと少しで家出るから早く支度しろよお」

まだパジャマで朝食をもそもそと食べているであろう共に幼稚園の年長である悠真と真奈に声をかけた。まだ家を出る時間ではないが、早くに言っておかないとズルズルと家を出る時間が遅れてしまう。母がよくしていたように、俺もそうした。悠真たちの体にも残っている習慣だ。そろそろきちんと目覚めるだろう。そう思っているうちに、

「「おにいちちゃん、おさら」」

とそろった声が後ろから聞こえてきた。食べ終えた食器を悠真たちがキッチンにいた俺のところへと運んできた。これも、母親がしっかりと教育した結果だ。俺は差し出された食器を受け取りながら、少し前まで母親がかけていたのと同じ言葉を言った。

「はい、ありがとう。明日もよろしくね」

そう言う悠真たちは声をそろえて、元気に

「「うん！」」

と返事をした。

(母さんの教育は素晴らしいものだなあ)

そう思いながら、俺は食器を洗って乾燥機に入れ、作動させてから自分も支度を始めた。

しばらくして、俺は悠真と真奈の手を繋いでいつもの、学校へと登校する時間よりも三十分早く家を出た。正直なところ……

(ねむ……)

しかし、これに慣れないといけない。そう心の中で呟いて、出かけていた欠伸を奥歯で噛み殺した。もう、前までのように悠真たち(こいつら)を送り迎えてくれる母さんと父さんはいないんだから……だから、これからは俺がやらないといけないんだ。

お祖父ちゃんたちは「一緒に暮さないか」って聞いてくれた。でも、俺は今の高校から変わるのが嫌だった。だから、俺は「僕はなんとかしてけるから大丈夫。だけど……」そう言って悠真と真奈を祖父に預けようと思った。しかし、悠真と真奈はそろって「おにいちやんといっしょにいる!」「そう言い張ったのだ。俺も祖父も説得を試みたが……断念した。俺がしっかりすれば何とかかな。そう思って、今は三人で生活している。たまに祖父も様子を見に来てくれると言ってくれていたので、少し安心できた。そして、三人暮し初日の今日は今のところ問題なく進んでいた。

「おはよう。悠真君、真奈ちゃん」

「「せんせいおはよう！」」

保育園についた。周りが主婦ばかりなので正直気恥ずかしい。

（慣れろ、俺。これがこれからの日常なんだ。慣れろ慣れろ慣れろ慣れろ慣れろ！）

そう言った俺の心の葛藤を知ってか知らずか、周りの主婦らがわらわらと集まってきた

「あらあ、上井さんのとこの息子さんじゃないのお。大変だったわねえ。お母さん」

と、話しかけてくる。

「え、ええ。まあ」

と、いろいろ話しかけられたが、適当な相槌でのらりくらりと、長話になるのを避けた。

（……そろそろ時間、まずいかなあ）

そう思った俺は、

「すみません。そろそろ学校に行かないといけないので……」

と言って、主婦たちの輪を抜け出した。そして、悠真たちと話している先生に、

「よろしくお願いします」

と頭を下げて言い、俺は学校へと急いだ。

校門が見えてきた。急いだ甲斐があつて、たくさんの生徒の姿があつた。俺は急いでいた足を周りの生徒たちと同じぐらいの速度に落とした。

「うおーい。真護お」

誰かに呼ばれた気もしたが、きっと気のせいだろう。

「おい。真護」

うん。きつと疲れてるんだ。だからさっきから幻聴が聞こえてるんだろう。

「真護。おいってば」

慣れないことが多かったもんな。仕方ない。

「こら！返事しろ」

という声とともに強引に百八十度回転させられた。

「なんだよ。祐人」

俺は目の前にいる同級生、星祐人^{ほしゆうと}へとぶつきらぼうに尋ねた。いつもの接し方だ。

「なんだよ。は、ないだろお、なんだよ。は」

こいつはいつでも元気だな。そう思いながら俺は

「で、用件は」

と、いつものようにぶつきらばうに尋ねた。

「ああ、おはよ」

そうだった。コイツ……挨拶魔だ。

「……はあ。おはよ」

俺は三割以下ぐらい関心、七割以上あきれながら挨拶を返した。しかし、授業についていけるだろうか。という不安が俺を取り巻いたが、両頬を叩いて気持ちを入れ替えた。

とにかく、ここからは唯一、今までの俺の生活と変わらない時間だ。いつもどおりにやっていこう。

そう思い、俺は祐人と共に教室へと向かった。

これから……(後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございます。
文章力なくてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8345p/>

兄として……

2011年10月8日13時07分発行